

“生命歯学部”のほろ苦い顛末

2005年（平成17年）6月1日

日本歯科大学新聞

号外

生命歯学部

学部等の名

平成18年
4月より
歯科

なぜ「生命

西洋流歯科医術を修めた小幡英之助は、明治11年に東京医学校（東京大学の前身）に歯科試験申請し、わが国の歯科開業免許第一号を受けた。

当時は、口中科や口齒科が用いられていたが、小幡は初めて歯科という名称を使った。

それ以降、この歯に關した名称が、私どももフィールドを表現する言葉として、今日に至るまで広く用いられてきた。

そこで、両学部の教授会、大学院の両研

本学（中原泉理事長・学長）はこのたび、両歯学部の学部名を「生命歯学部」「新潟生命歯学部」、および大学院の両研究科を「生命歯学研究科」「新潟生命歯学研究科」に名称変更する。

歯科は、明治以降（〇〇年間にわたって、歯という名称ゆえに、患者国民から必要以上に小さい軽い存在として見られてきた。本学は、この患者国民の先入観と誤解を払拭するため、現行の歯科医学・歯科医療の実情にそぐわない名称を、生命科学のレベルに相応しいネーミングに変更すべきであると考えた。昨年七月、法人理事会は学部等の名称変更について機関決定し、同月より文部科学省と折衝を重ねてきた。

文科省は当初、どうもしっくりこない等と懐疑的であったが、本学は、歯は歯肉・歯槽骨・顎骨・口腔周囲組織内に植立する器官であり、歯のみに限局した学問・医療ではないとして、「歯科医学は生命体を学ぶ学問」であり、「歯科医療は生命体への医行為」であることを主張した。その結果、本学に賛同して同一行動を取ってきた大阪歯科大学と共に、本年一月中旬に文科省の承認を得た。

研究委員会に諮り、いう反対意見もあつたが、委員会の承認を得た。校友会本部理事会の学生に、次年度より二字を冠することを

今から20年ほど前、薬学部の名門東京薬科大学が、生命科学部を増設した。研究者等養成の学部であったが、“生命”という表現が印象的だった。

それから薬学系には、生命薬学科や応用生命科学部がつけられた。これに追随して、獣医学部が応用生命科学部、理学部が生命理工学部や物質生命科学部、工学部が生命工学部、農学部が農学生命科学部と、次々に生命を冠する学部や学科がひろがった。のちには、日本獣医生命科学大学という校名もあらわれた。

各学部は、生命という究極の名称によって、自らの弱点をカバーする意図が見てとれた。この広がりを知った平成16年（04）春、私は無然とした。

本来、人体という生命体に医学的侵襲行為をするのは、医師と歯科医師だけである。歯・口腔という局所を扱うとはいえ、あくまで歯科医学は生命体を学ぶ学問であり、歯科医療は生命体への医行為である。医学部は生命を付する必要はないが、歯学部こそ他の学部に先んじて、生命を冠すべきではないか。私は、ひとり遅れをとったとほぞをかんだ。

私はためらうことなく、同7月27日の法人理事会に、生命歯学部への名称変更を諮った。各理事は当初、唐突な提案に面食らい戸惑っていた。私は40分間にわたって懇々と説いて、晴れて諸氏の賛同をえた。

理事会の承認をうけて、ただちに文部科学省医学教育課に届け出を打診した。交渉は、法人事務局の高橋慎一事務局長、大場憲栄事務局次長が当たった。本来、校名や学部名は命名も変更も、大学の裁量により届け出のみで済む。

ところが、医学教育課の担当事務官は、ダメとは言わぬがノラリクラリとして、一向に届け出を認めようとしない。明らかに困惑していて、彼らは、生命歯学部には違和感をおぼえると言う。では、生命理工学部や生命工学部には違和感がなかったのか、と当方は迫った。私も出向いて1時間、生命体を扱う歯科への理解を求めて、変更理由を切々と説いた。

彼ら第一線の事務官は忙しく、じつによく働く。面会は、いつも午後5時半か6時であった。練りか

えし交渉しているうちに、たがいに気心が知れてくる。双方の口から“生命歯学”が飛びかい、彼らもその言葉に馴染んできていた。

ついに担当事務官は折れて、特段の支障がないかどうか、文科省の事前協議の対象にすると踏みだした。事前協議は、大学設置・学校法人審議会大学設置分科会運営委員会が行うという。そのさい、名称変更する必要性等の理由書が重要である。そのとき、カリキュラムとの整合性が問題となる。また最終的に学内外の理解が得られるか、ということも影響する。

理由書のポイントをアドバイスされ、(ふつう届出書の変更理由は、10行ほどでよいのだが)、私は、400字詰めで20枚を綴った。その冒頭に次のように述べた。

「食育の本体をなすのは、歯・口腔の咬合・咀嚼・嚥下による食物摂取である。これには、歯科医師による要介護高齢者などの口腔ケア・嚥下リハビリ・摂食支援・栄養支援も重要なポイントとなる。高度福祉の時代を迎えて、国民・患者から生涯を通して、歯・口腔の健康を保持し増進し健康な生活を営む、というQOLの向上が求められている。

とりわけ、消化器系と呼吸器系の第一ステージとして、歯・口腔と全身の関連性が注目される。近年、歯科疾患が全身疾患と深く関わり、歯科医療が長寿社会における健康余命と健康長寿に寄与することが理解されてきた」

審査する運営委員は40名らしく、私たちは分厚い理由書40部を担当事務官に届けた。

前後するが、私は抜け駆けをするつもりはなかった。親しい4校の歯科大学・歯学部の理事長・学長に声がけし、一緒にやりませんかと誘った。3校は、初手から無関心または無理解であった。大阪歯科大学の佐川寛典理事長・学長ひとり賛同をえた。年齢は一桁ちがうが、肝胆相照らす仲であった。だが、同大学は理事会を通ったが、教授会で否決された。結局、残念ながら本学のみとなった。

翌年、平成17年(05)1月19日に運営委員会がひらかれた。京都出張中だった私は、気もそぞろであった。当日連絡はなく翌日忙しく帰京して、昼すぎ飯田橋の公舎で汗をながした。その最中に携帯が鳴り、裸のまま風呂を飛びだし、スッテンと床に手

酷く転倒した。問題はありませんと、高橋の第一報だった。追って、大場より文科省の通知書がファックスされた。

それは、「名称変更の手続で可能」という、まことに素気ない一行であった。文科省が届け出を受理する、という鶴首した知らせなのに、私は腰の痛みにも息も絶え絶えだった。

さっそく、学内手続きをすすめた。

2月24日、新潟の教授会に提議し、15分ほど名称変更を説明した。歯・口腔と生命体に関する真摯な質問があり、全員異議なく承認された。

ついで同27日、東京の教授会にて同じく20分ほど説明した。一部教授から、医学部もどきと強硬な反対意見がでた。約1時間、激論を交わしたが、継続審議となった。

翌3月29日の教授会で、再度論議した。時期尚早である、1校だけがやることはない、と反論がつづき、時折、怒号が飛んだ。1時間余り紛糾し、無記名投票を強要された。

3月中に変更届をださなければ、4月からの実施はできない。無為に1年遅れになる…。

学内外に、怪文書がでまわる騒ぎになった。

翌4月25日、三度目の教授会が2時間余。ついに結着はつかず、無記名投票となった。

その結果、賛成25票、反対15票であった。人の本心は分からぬもの…無記名投票の後味の悪さがのこった。

翌5月9日に新潟の教授会、10日に東京の教授会で学則変更の承認をうける。あわせて、校友会本部役員、全在学生に新しいネーミングを周知した。

翌年の平成18年(06)4月1日より、生命歯学部となった。あの3ヶ月の遅れがなければ、前年度に実施できたはずだった。図らずも、遅延したおかげで、本学のエポックとなる名称は、本学創立100周年の新紀元にスタートした。

ともかく、フロントランナーは、常に向い風と闘う。風向きが変われば、一気に追い風に乗るだろう。それを願いながら、私は、ほろ苦い気分をリセットした。

(写真：生命歯学部を報じる大学新聞の号外)